

突撃インタビュー

青柳碧人先生に聞く

恒例の突撃インタビューも 19 回目となりました。今回は、『浜村渚の計算ノート』の著者である小説家の青柳碧人先生です。このインタビューは 3 月に行い、浜村渚の世界観や物語作成における著者の想いについてのお話を伺うことができました。また、塾講師時代の経験談、小説家としてご活躍されるきっかけとなったお話、数学を学ぶ意味など、私達にとっても参考になりました。

1 高校のときは数学が苦手

— 生い立ちからお伺いしたいのですが、数学を意識するきっかけとなったのは？

僕の生まれは千葉市の美浜区です。小中学校時代は緑区の越智というところで過ごしました。数学を意識したということになると中学校時代になります。地元の進学塾に通い始めて、そこで先生の話の聞いているうちに数学っていうのは面白いものだと思い始めました。算数は普通程度にはできたと思います。例えば、円錐の体積でなぜ $\frac{1}{3}$ をかけるのかとかは、大した疑問ももたずにそういうものだと思って計算していたような気がします。

— 高校生のときはどのような生徒でしたか？

高校は国立の東京学芸大学附属高等学校に進学しました。その頃はあまり勉強はしてなくて、僕は演劇をやっていました。学校も別に勉強しなくてもいいし、一浪くらいしても別にどうってことないというような雰囲気でしたね。「高校 3 年間は遊びなさい」じゃないけど好きなことはやりなさいという感じでした。

その当時は数学なんて一番訳がわからなかった。教育実習生のための学校だから、大学生が教えても理解できるような子ばかりを集めているようなところがあって、周りにはできる子がいっぱいいたのですが、僕はそんなに数学ができるという感じではありません

でした。授業中も「何を言っているのかよくわからないな」というような感じで聞いていましたね。当時、 \sin 、 \cos なんて本当にわからなかった。何のためにやってるのかということも含めて。

学生の頃は「何なんだろうこれは？」という素朴な疑問は誰もが抱いていたと思うのですが、多分、そのままにして大人になった人が多いと思うんですね。僕はちょっと興味があったのか、大学に進学してから、もう一回「あの頃やっていたのは何だったのだろう？」と振り返ってひとつひとつ自分で確認していききました。

— 高校数学で好きな分野と嫌いな分野は？

高校の頃、比較的できたのが 2 次関数のグラフが動く部分とか、微分・積分の一番始めの部分でそのあたりは結構好きでした。あれだけは当時からすごさがわかったというか、「こんな簡単にできるんだ」、「よくこんなものを見つけたな」という感動が当時からあったんですね。

訳がわからなかったのは、三角関数です。定義からつまずいているものだから、その後、2 倍角とか半角とか言われても全然わからず、そのままズルズルいってしまいました。今考えると、一番大事なところをおろそかにしなかったら自然とわかってくるのかなという気持ちです。だからぜひ教える側の方には、初めの三角比のところ、つまずかないようにして欲しいなと思います。

— こんな風に教えてほしかったというところは？

微分・積分もそうですが、どういうきっかけで数学者がこれを見つけたのかというところを教えてくれたら、もうちょっと理解が進んだのかなという気持ちがあります。何をやりたくて、何をやっているときにどうやって見つけたのか、というようなことですね。言っていることはわからなくても、数学者がやりたかった熱さみたいなものが伝われば、ちょっとは知ろうという気も湧いてきたかもしれなかったですね。

僕が好きなのは、ガウスが9歳のときの1から100まで足す話です。あれってすごく有名だと思ったら、生徒はあまり知らないんですね。でも、説明されたら結構ピンとくるじゃないですか。それって結局シグマの考えにもつながっていく訳ですよ。僕はシグマを初めて学んだとき、記号の書き方ですごく面食らいました。ですが、「これガウスのやつじゃないか」と思ったら、すぐにピンときましたね。そういうストーリーとか小ネタみたいなものは、塾講師時代も結構話していましたね。

ひとつ言いたいのは、数学の新しい記号ってすごく面食らうので、記号が登場したときには子どもが書き順をやるみたいに、記号の書き方からちゃんと指導したら、ちょっとは抵抗が少なくなるのかなと思います。学校では α (アルファ) の書き順と a (アルファベットの A の小文字) の書き順って逆ですよ。それがすごく戸惑うみたいです。これって海外でレンタカーを運転するくらいの戸惑いだと思うんですよ。子どもたちにはそこから説明しなきゃいけないというのは常々思っていましたね。



2 大学時代と塾講師の経験

— 大学生のときはどのような学生でしたか？

僕は早稲田大学教育学部社会科地理歴史専修に在籍していました。世界史が好きだったことと、教員免許を取りたかったということがその理由です。

専攻は世界史だったので、数学とは全然関係がなくなりましたが、理系の授業がなくなっただけで、もったいないなという感じがして、高校数学の参考書とかを授業の合間に読んでいました。その時に受験勉強から解放されたという思いがあったのか、自由に自分なりに捉えられるようになったのかなと思います。

— 大学時代はクイズ研究会に所属していたとのことですが？

早稲田のクイズ研究会に入っていました。このクイズ研究会は、どちらかというと飲み会とかスキーに行ったりと、普通のサークル活動の方に力を入れている面が大きかったのですが、僕はしっかりとクイズ研究をやっていた方でした。

— 作中の推理パートはクイズ研究の発想などが活かされていますか？

他の人が知らないことを言いたがる場所があるので、確かにそういうところはあるかもしれないですね。数学者についていろいろ言う場面は完全にクイズの影響があると思います。数学者というのはクイズの問題にもよく出題されるので。

— 大学時代から塾講師をされていたそうですが？

中学受験，高校受験を目指す進学塾で講師をしていました。僕は中学校の内容の指導が一番得意で，中学校の勉強は全教科全科目何でもできますよということでやっていました。

また，大学を卒業してから僕は就職活動をしなかったのですが，26歳から地元の千葉の学習塾で働き始めました。その塾が自由な塾で，なんでも好きなようにやって良いという感じだったので，自分なりのテキスト作成や教え方の工夫をしていました。塾長先生が1人いて，その先生がやっている個人塾なのですが，公立の地域の子たちを対象にしています。1つのクラスを3つに分けて，上はすごく上を目指す，下はちゃんと学校についていけるように頑張ろうと，クラスによって授業のやり方を変えていました。塾長先生が数学好きというか，思い入れがあるのか，特に上のクラスの数学の授業ではすごく難しい問題をやっていました。わからなくても食らいつく子を育てるみたいな感じです。この塾講師時代は数学に触れることが多くなりました。僕は一応社会担当ということで入ったのですが，どうしても人手が足りなくなってくると，本来の担当ではない数学の採点をさせられました。その日初めて見た難問をやらなければいけない訳です。それで数学に触れる機会も多くなり，だいぶ鍛えられた感じはあります。



3 小説と数学

— 作家になったきっかけは？

実は俳優になりたくて養成所に通っていたのですが芽がでなくて，就職活動もしていません。どうしようかと思っていました。

もともと子どもの頃から何となく小説を書いていたのですが，応募してみようと思って書き始めたのは23,4歳のときです。クイズ研究会の高校生の話を書いたものでした。そのあともずっと書いていて，26歳のときに実家に帰って勤め始めた塾で，数学の得意な生徒を見つけ「この子が探偵役だったら面白いんじゃないか」と思い，書き始めたのがデビュー作の「浜村渚の計算ノート」です。

— 小説家になったきっかけは，小説と数学どちらが入り口ですか？

小説ですね。作家のデビュー作は自分の身の回りのことを題材にすることが多いのですが，僕にはそれが塾だったという感じです。

数学の作品を作ろうと思った大きなきっかけは，子どもたちの「何でこんなものをやるんだ」というような疑問であり，それに対するアンサーがあったらいいという気持ちとそのひとつです。「ものを書きたい」と思うには，怒りじゃないけれどそれに近い感情が必要だろうなと思っています。そんなこと言うんじゃないっていう気持ちが多分あり，本当は面白いんだぞって事を伝えたい。塾講師の大学生から『なんでこんなことやんなきゃいけないんだ？』と生徒に聞かれたのに答えられなかったんですよ。」と言われて，「なんて答えるべきなのかな？」って話は普段からしてましたね。だから，そういうものを形にしたかったということも一つあるかな。

それと，当時ちょうど公開されていた「博士の愛した数式」という映画を見ました。これはけっこう面白いなと思いましたが，数学を題材にした小説や映画は当時はあまり

なかったですね。探偵小説もので、数学が好きで、しかも女の子が主人公となるとあまりないかなど。数学者で探偵という、例えば高木彬光さんの神津恭介という有名なシリーズがあるのですが、あれは解決にあまり数学が関係ないですよ。難しいこと言っているのにあまり関係ない。あとは森博嗣さんのS&Mシリーズというのがあって、あれもちょっと小難しい感じでもう少しとっつきやすければいいのになと思って探したら、「数学ガール」というのがでてきました。これは今ほど有名ではなかったのですが、買って読んだらものすごく難しい。もう少し読みやすいものがあつたらいいなと思い、小説を書いたということですね。

— 数学の題材やネタ選びで苦労されていることはありますか？

苦労してますね。最初のうちは知っていることを書いていけばよかったのですが、毎回毎回となると大変です。それに、わかりやすく書かなければいけないことと、僕が理解できていないことは書けないじゃないですか。渚が言葉の端々に言うくらいなら書けても、がつつり解決に関わってくるとなると、やっぱり自分が理解していないといけませんよ。いろいろな本を読むのですが、参考書に書いてあるような方法では僕は理解できなかった。でも、小説ですから数学的に違うって言われて、怒られても良いわけじゃないですか。それならば自由にやろうと思ったという感じですね。

でも、資料集めをしているうちに面白いなと思えることはいろいろあって、日々発見しています。世の中、いろいろなことが数学と関係しているんだなという目で物事を見るようになりました。数学が好きならこう考えるかなとか、浜村渚ならこう考えるかなというように日々過ごしていることが多くなったかもしれませんね。

— そのような過程で、特に思い入れのあるエピソードはありますか？

4冊目だったかな？折り紙の話があります。2通りの箱が折れる展開図が出てくるのですが、これは当時折り紙のことを書きたいなと思って検索したら、数学セミナー¹⁾の記事を見つけて、そこから謎を無理やりひねり出して書いた話です。

上原隆平さんという北陸先端科学技術大学院大学の方に、「これ使って良いですか？」とお願いしたら、「使っていていいですよ」みたいなやり取りが生まれまして、「私が勝手にやっていた研究をよく見つけてくれましたね」と言って下さいました。それが次の年の入学式のときに「この研究が小説で使われました」と大学側で発表されたのです。それは思い入れがありますね。発見されたばかり²⁾の定理というか、そういうものを使えたというのは思い出深いです。

— 敵役で「黒い三角定規」が登場しますが、その世界観には何かモデルがあるのですか？

アメリカンコミックのバットマンの世界観を参考にしました。バットマンの怪人はもともと普通の人間で、だけど悲しい事情があって怪人にならざるを得なくなった人たちなんです。ティム・バートン監督のバットマンシリーズを見ているとその悲しさがにじみ出ています。最終的にはやっつけられるのですが、その時の恨み事とか見ていて悲しいなと思い、それを参考にしたところはあります。だから、人間としての名前とテロリストとしての名前があるというのはバットマンを意識

¹⁾ 数学セミナー 2012年11月号(日本評論社)

²⁾ "Folding and unfolding in computational geometry" J. O'Rourke Lecture Notes Comput. Sci. Vol. 1763, Springer-Verlag, Berlin, 2000, pp. 258-266. Revised version of Proc. Japan Conf. Discrete Comput. Geom. '98, Dec. 1998, pp. 142-147.

しています。

主人公の女の子は塾の生徒をモデルにしたと話しましたが、他の周りの警察の面々とかも大体が塾の子たちをモデルにしています。敵の方はモデルはあまりいませんが、キュリー・オイラーだけはモデルがいますね。

— 最初に数学のネタがあるのか、それとも、ストーリーに数学を当てはめているのか？

数学のネタが先かな。今回はこのテーマでいこうと思って、そこに当てはめていくのが普通の作り方だと思います。こうやって解決すると決めて作る場合もあるし、このテーマで話を書こうと書き始めることもありますね。

テロリストを先に決めることもあります。ルービック王子は、ルービックキューブの話を書こうと思って、こういうテロリストにしようと決めて書きました。

— オイラーだけ作中では“さん”付けでした。オイラーに対して特別な思い入れがあるのですか？

特になのですが、ものすごく多産な数学者ですね。オイラーが多分、史上一番論文を出しているのではないですかね。「2 番目がエルデシュだ」みたいなことをこの間、何かの本で読みました。オイラーは高校数学に通じる多くのことを発見したと書かれていたので、渚が尊敬しているという設定にすればこれから先もいろいろできるのではないかと考えてそういう設定にしました。オイラー先生と言ったのは、2 冊目でしたかね。

— 今、ネタにしたいと思っている数学の題材はありますか？

実はユークリッドのことをまだ全然やっていないんですよ。一番基本的なところなのにやっていないなと思って、それがずっと引っかかっています。なかなか上手くはまらなく

て、先送りにしてしまいました。他にもネタは結構あるんですよ。組合せの話とか、ベクトルの話も上手くできればいいなと思いつつも、何かちょっと上手くいかないなと3 年位経っています。

こう考えてひとつひとつ見てみると、高校数学って面白いですよ。あの頃は全然面白くなかったのに…。

— 数学以外で小説を通して伝えたい事とかはありますか？

今は塾をやめてしまったので、もう教育熱がそんなにあるわけではなくて…。ミステリーがもともと好きだったので、推理小説をもう少し面白く世の中に広めたいという気持ちの方が今は強いですね。他の作家さんとの付き合い、例えば京大のミステリー研究会のようなミステリーと寝食を共にしてきたような人達との付き合いが多くなると、自分ももっとこっちの方で頑張りたいなって気持ちが強くなります。もちろん、渚シリーズはまだ続けていこうかなと思っています。

妻と口喧嘩になったとき、何がきっかけかわからないけど、妻に「あんたの書く小説って屁理屈ばかりだ！」と言われて、喧嘩中なのに、それを聞いて笑ってしまいました。その発想はなかったと思いました。「ミステリーは屁理屈を楽しむ文学なんだよ」と言って、それで喧嘩が終わってしまいました。それは目から鱗でした。確かに、浜村渚って屁理屈ばかりだといわれて、そうだなと思いました。

4 学校とは？数学とは？

— 学校で講演等もされてると思いますが、どのようなお話をされますか。

僕の得意なというか、話していて面白いことをやっています。やっぱり何か面白かったなと思って欲しいじゃないですか。授業だと

連続性があって、絶対やらなきゃいけないけれどつまらないところもありますよね。僕の場合はテストをする必要もないですし、面白いところだけをやる感じです。

この間やったのは、数字を4つ並べて10をつくる、小町算みたいなやつです。ルールはあまり考えなくてよくて、自由に順番を変えてもいいし、という風にやったら結構いろいろ答えが出てきて「面白かったです」と言ってくれました。ルートを使っている子がいたり、指数にしたりとかね。そういう風にしたら、皆結構考えてやってくれたんですよ。

後半は僕の好きな数学者の話をしました。ピタゴラスとオイラーとラマヌジャンの話でしたね。

— 学校で教えてみたいと思いますか？

学校の先生はちゃんとしていなければいけないですよ。例えば数学者でいうと、数学者はちゃんとしていない人が多い。アルキメデスにしろ何にしろ、ホームレスに見られたりとか朝ちゃんと起きてこなかったりとか。僕が言いたいのは、見本となる生活態度をしなければいけないということです。でもね、それって人間らしくないところもちょっとあるじゃないですか。そういうところが窮屈だなと思うんです。

学校は常識的なことを教えるところというイメージがあるんですね。そこから旅立っていく人は常識はずれのことをしてもいいのかもしれないけれど、常識を知らないと常識はずれができないから、そのための常識を教える場所なのかなという気持ちがあります。でも、そこで指導する人間としては常識的な振る舞いが求められるのかなと思うので、僕には向かないなと。

— 「黒い三角定規」は学校をイメージしているのでしょうか？

真面目すぎる人達をイメージしています。学校にはそういう人達は絶対必要だと思うんですよ。怒られる役や嫌われる役ではないけれど、必要だと思うし、尊敬されて然るべきだと思います。

その話に通じるかどうか分からないけれど、「教科書に載った途端つまらなくなる」という言葉があるじゃないですか。小説でも音楽でも教科書に載ってしまった途端、格調が高くなって自分達のものではなくなってしまふみたいな…。それがすごく分かるなという半面、そういうのも必要なんだよなという風に僕は思っています。

— 必要悪みたいなものですね？

そうですね。悪と言ってはいけないですけど。でもね、学校がなければ駄目なんです。学校である程度義務っぽい感じでやらないと、やらなかったことって結構多いじゃないですか。

特に数学がそうです。数学というと学校の悪いものの象徴のように語られている。小説の中では本当にそうです。数学はつまらない授業の代名詞ですよ。だけど、数学が学校であったからこそ、数学が好きになれた人も多いと思うんです。そこは絶対忘れちゃいけないところだと僕は常々思っています。

— 「数学なんてなんで勉強するの？」という子どもの疑問に、今ならどのように答えますか？

今でも難しいですね。新たな面が見えてきた分、難しいところもあります。「勉強したら面白い世界が広がるよ」という風にしか言えないですね。僕なんて全く興味がなかったら、もう一回覗こうと思わなかった訳だし。

「なんでこんなことを？」と思うようなことを、突き詰めて考えようと思った人がいるってことだけは伝えたいかなと思います。

— 当時 \sin , \cos なんて何で勉強するのかわからなかった自分に、今ならどのような言葉をかけますか？

「オイラーという数学者がいてね。」という風には言いたいですね。オイラーが定義したとか、記号を考えただけだけれども、一生を数学に捧げた人がいるんだよという話したいですね。そうしたら、多分興味が湧くかなっていう気はします。

偉人のイメージは小学校のときに結構できると思いますが、伝記がバーッと並んでいる中に数学者はいないですよ。ニュートンを入れるならいいですけど、オイラーって伝記にいないですよ。多分子どもにはすごさを伝えるににくいのでしょうか。

5 高校数学へのメッセージ

— ライトノベルを読む読者層へ、数学の魅力伝えるような意識はあるのですか？

はじめはあったかもしれませんが、今はそんなに意識はしていません。「僕はこれが面白いと思う」みたいな感じで書いています。

あと、「学校の先生はこうは言わないかもしれないが、こういう見方もある」というような、数学に限らずですが、つまらないものでも、見方によって変わるんだよというようなことを伝えたいかな。

— 物事を多面的に見てほしいというメッセージがあるということですね。

そうですね。数学って何の役に立つのかわからないけれど、研究している部分がありますよね。その面白さみたいなものを伝えたいという気持ちはあります。数学が好きな人の伝え方は、ちょっと難しいんですよ。僕は自分が一歩引いている立場なのかなと思っていて、説明するときは中学生に説明するつもりでいます。

中学生が分からないことは、大半の大人も

解らないことだと僕は思っています。だから、難しいことは中学生に説明する気持ちで、説明していこうかなという思いは今でもあります。

— 中高の教員に向けてメッセージをお願いします。

日々努力されているから、努力してくださいとは言えないですね(笑)。僕が考えているようなことは、すでにやられているような気がします。学校は閉鎖的なイメージはありますね。外から見ると、中で何やっているのかわからないという印象はあります。だからもっと、外に出てもいいのかなという気持ちもあります。

— 学校自体も先生方も閉鎖的だと思いますが、その原因は何だと思いますか？

真面目じゃなきゃいけないという、周囲の期待じゃないでしょうか。特定の生徒にひいきすることはいけないし、特定の親御さんと飲みに行ったらいけないし。そうするとどうしても、窮屈な感じになりますよね。真面目であることを求められている部分もありながら、そのせいで閉鎖的になってしまうのかなと。

— 「外に出る」とは具体的にはどのようなことでしょうか？

数学でいえば、それが実際に使われている現場を見るとか。大学の研究室もいろんな研究室があるじゃないですか。最近見学したいと思ったところが僕にはあって、雷の発生する研究は見てみたいと思っているんですよ。出版社の人にどこか見学できないかと聞いても、なかなかなくて。工場見学とかは面白いじゃないですか。自分にとって学校は楽しかった場所なので、楽しいところではあるんだろうけど、外から見るとなにやってるのだろうというところでもありますよね。

— 教員は休日も教員を背負っているということがあります。世間離れしている部分はあるかもしれませんが、先生のおっしゃる「外を見なさい」という言葉は大事なかなと思います。

— 最後に中高生にメッセージをお願いします。

先程も言いましたが「見方を変えること」ですね。つまらないと思ったら見方を変えることです。

数学が必要なんだという熱い気持ちをもって、発展させてきた人たちがいるということを知らせてあげたいという気持ちもあります。

それと、自分が今必要だ、好きだと思ったことを100%やってほしいです。

— 本日はお忙しい中ありがとうございました。

